



TITLE:

歴史と社會學との關係(一)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 歴史と社會學との關係(一). 經濟論叢 1920, 11(5): 575-592

ISSUE DATE:

1920-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/127724>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五號

第十卷

論說

歴史と社會學との關係(一)……………法學博士 財部 靜治

地方税としての地租の課税標準……………法學博士 神戸 正雄

限界的生産力の勞賃説……………法學博士 田島 錦治

農業社會主義的土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

價值論上のリカルドとマルクス(二)……………經濟學士 堀 經 夫

時事問題

北支那の飢饉……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

濠太利の貿易と海運……………法學士 小島昌太郎

徳川時代に於ける農本の意義……………法學士 本庄榮治郎

將來の産業的指導者としての日本の諸國……………法學士 石川 興二

京都市經濟學會第二回講演會記事……………法學士 大森 研造

保險に關する新著紹介……………法學士 小島昌太郎

經濟論叢

第十一卷 第五號 (通卷第六十五號)

大正九年十一月發行

論

說

歴史と社會學との關係 (二)

財部 靜治

一

「一名稱假令は社會學と、いふか如き名前の、重荷を負はしめんよりは、名前なしにその學を修めん哉」とは、史家 Freeman (一八三三—一九二二) か、その好著「比較政治學」附録の、幾多詳註中その一つに於て、説きたる所なり、實に史學及社會學に於ける考察對象は、共に人間社會なり、從ひて歴史の考察を擴げ、特に事實解釋の方面に、その研究を進むることゝならんか、二學は符合するに至るべきや、親易き所たり、從ひてフリーマン以外に於ても、聰明なる近時の史家、假令は Heinrich von Treitschke は主張し得たり、特別科學としての社會學は、無用の長物なりと、かく

て氏は之が特立を、正しとすることに反對したり、夫れ果して然るか、吾人は二學の何れに就きても、門外漢たるに拘はらず、これかために専門知識を、補ふこと少からざるを以て、年來聊か注意する所なきに非ず、然るに近日に至り、H. Scherrer, Grundsätze und Gesetze der Soziologie, 1914に接手し、二學の關係に就き、説明せる所を一讀せるに、頗る興味を惹けり、特に同書か元來著者一九〇五年の著書、Soziologie und Entwicklungsgeschichte der Menschheitの第三編をなすべきものなるを、事情に依りその形を代へて、公けにせりとの著者の告白に鑑み、一顧の値ある心地せられしかために、今その所論を骨子とし、平素學修せる所により、之を補綴して本編を作すこととせり、燕雜なる一編により、却りて人を誤るもの、あるへきを虞ると雖も、一は之により寄稿の責を塞かんとし、一は後日精研の足代に、供せんとするの微志に、驅られし結果なり。

二

歴史は社會に關する、一の具體的敘事學にして、人間社會に就き、過去の一描寫を遂げんとするの問題とする所は、過去に於て何か、社會的實在たりしかにあり、詳言すれば過去のあらゆる出來事、及その諸關係にあり、時の先後により、決せらるゝか如き人間經驗の、連續を取扱ふべく諸形式の口碑、傳説、文書又は紀念物による遺蹟、その他過去につきての、争ふへからざる證據物を土臺として、是等經驗の根源及原因を、示さんと勉む、特に粗野なる原始的社會狀態以上なる、

高き開化の範圍か、斯學の研究範圍に屬す、舉證され得へき、直接交互關係に立てる、統一の一復合體と、觀想され得へき各國民、少くとも諸民族中のかゝる群を、第一に尋ねへし、一史學者により、我等の採用する史學とは、「社會の細胞としての、人の動作の發展を、研究する科學である」と、定義せらるゝ所以なり(大正二年再版坪井博士著史學研究法三七頁參照)而して社會學は、社會生活に關する、一の抽象的理論的學問にして、社會組織及社會の變動を、支配すへき諸法則諸原理を究む、從ひて歴史は、社會學研究上、假設さるへき記述的材料を、授くとも謂ひ得へし、されは現に數社會學者、中にも著聞するか如く Spencer は、歴史を以て敘事社會學と、同義たらしめんとせり素より取扱の仕方に就きては、二者異なる所あり、少くとも從來に於ける、學者の取扱上、二者取扱方の特色に相違あり、歴史は敘事的なり、一國民一社會の運命を察し、その過去に於ける統治者の行動に、特に着眼するも、社會學はその時々々の社會狀態、經濟及政治狀態に就き、進みて之を究む、かくて社會學は一國民につき、その構成及類別の原因を示すべく、その時々々の社會狀態及成層に關する、一洞察を遂けしめ、是等は如何にして起り、又發展せるかを示し、從ひて又諸政治的綱領、諸階級の權利、階級別は、何によりて然るか、その理由を明かにせんとす。而も亦社會學の一部としての發展學説は、人間發展の諸要因を示し、特に又特殊の一國民發展の、諸要因を示すへきに、かゝる一國民の歴史即ち所謂國別史 Partikulargeschichte も、特に敘事以上に、比

較を使用し、出來事の特系列を、解釋せんとするものにありては、右社會學の一部研究と、符合すへしとすべきものあり、その外又諸國別史を最後迄擴大綜合し、あらゆる期間及國民を、出來る丈け中斷なき、序次及關係により、網羅して所謂萬國史又は萬民史 Universalgeschichte を、編成し得へしと唱ふる人あり、又史實を特定の一般法則に、歸結せんとする歴史哲學の研究あり、二學の關係に就き、益々興味を喚起せしむるものあり、これ吾人かその關係を、概覽せんと欲する所以なり、素より吾人は之につき、書かれたる歴史、即ち主觀的意義の歴史につき、説きつゝありされど社會學と、此意味の歴史との關係を、了解するためには、先づ社會學と、客觀的歴史との關係を、一瞥するの要あり。

三

客觀的歴史は、事實上人間社會内に、起れることそのものに外ならず、そは人類の全生涯に於ける、出來事の行列入り、此意義に於ける歴史は、人類成立の端緒より、今日に至る迄、人間社會の全運行につきての便利なる一名目に、外ならざるや明かなり、然るに社會學は、その發生學的方面に於ては、その運行内に宿さるゝ恒同要因、即ち社會發展の法則、又は原理を究めんとするから故に、若し客觀的歴史中に、現在の社會現象を含ましめたりとせんか、その歴史は社會學の研究對象たるべく、この意味に於て社會學は歴史の學問なり、されど客觀的歴史は、社會學の研究對象

にのみ限らるゝことなし、その諸相により、特に社會諸學一切のために、その研究對象を授け、又一編の結構ある知識として、書かれたる歴史 *History* 又は普通に所謂歴史と呼はるゝもの、研究對象たり。

四

主觀的意義の歴史 又は書かれたる歴史は、人間生存の過去に於ける、出來事の記述又は物語なり、人間過去の一部に就き、文書その他の遺蹟を助けとして、吾人か編成し得へき、心的描寫なり、唯過去の社會現象に就き、吾人か歴史により、汲み得へき知識は、主として文書の證據物に依頼す、特に研究の手を着け始めたる、一時代一國より超越して、自由考察を遂げ、全開化一般又は開化中重んずべき個別元素の、比較研究的一般叙説に、進まんとする場合にありても、年代志的又風土誌的に之を縁取るは、機械的に全研究の端緒をなす、何れにしても取扱はれたる事實か如何なる年代及世紀、如何なる國民及國土より引用せらるゝかを示すは、斷乎として重んずへし、就中該括的文明史にありては、粗野民族の社會狀態をも、相當に斟酌すへきも、そは土俗學的根據に於てのみ、之を究め得へく、此點につきては社會學的遠景は、歴史中に描き出さるゝの要あるへし、而も亦歴史は何れにしても過去の部分的描寫に外ならず、特に文書の證據物の、性質及備不備に應じ、精粗の別を生ず、又主として書かれたる、記錄の證據物に、立脚するを以て、

知識の一體としての歴史は、元來人間の生存上、「有史時代」として知らるゝものに限らるゝを例とす、従ひて普通の歴史は、社會發展に於ける、至要階段に關し、有用なる知識を授けず、即ち文献の未だ徴すべきものなきも、その間諸社會施設は、徐々に形成せられ、開化の土臺据えられたる時代につきては然り、社會學者としては、此時代を取扱ふため、土俗學及人文的人類學により授けらるゝ、現時の夷狄野蠻民族の、生存に關する敘事に、依頼するの外なし。

又歴史の方法は、直接觀察法によるよりも、寧ろ間接研究法たり、換言すれば文書その他の證據物を、その方便とせる研究法たるを以て、現社會の記述を含むこと稀なり、されば社會學者は現社會現象の知識につきては、素より自己一家の觀察力を、使用すべきと共に、別に民誌 Demography その他現社會に關する、種々の記事的統計的材料の、蒐集によるの外なし、加之にかゝる現社會現象に關する知識たる、一事實の科學的價值は、その觀察者の時より、時代を経ること、遠きに従ひて遞減すへしとの、一般原則に従へば、第一に重要視すべき所なり。

要するに知識の一體としての歴史は、社會學の研究對象に關する、完全呈露を授くることなしこは歴史家にとりても、明かにせらるゝ要あり、何等書かれたる歴史なきも、亦社會學は成立し得べきは(それは早産的知識たるへしとするも)眞理なり、Mackenzie の主張を意譯すれば、歴史なき社會學は、「空虚」たるべきも、心理及生物學なき社會學は、「盲目」たるへし、歴史は前述の如く、社會

發展の初期諸階段に於ける、諸事實の知識を授くることなく、又現社會生活の諸事實に關する、知識を授くることなし、故に社會發展、又は一特定施設の發展を究めんとせば、社會學者は歴史と同様土俗學及民誌に依頼するの要あり、假令は家族に關する社會學説は、書かれたる歴史により、授けらるゝ知識のみを本とし、立てらるゝを得ず、一施設としての家族發展の、初期諸階段につきては凡て、土俗學に依頼することによりてのみ、その説を立て得べく、又最近の諸階段、家族生活の現存諸傾向は、現社會に關する、民誌及統計材料に依頼することによりてのみ、發見され得へし。

五

普通の歴史は科學的見地よりせば、一定の缺點を宿すかために、社會學者にそりての效用を、一層狹めらるゝ、諸缺點中最も非なるものは、虞らくはその諸題目の陳述上、科學的精神よりも、文學的精神勝てることにあり、之かために歴史の叙説を、物語態たらしめ、社會の生存に於ける、劇的元素を過度に揚言するに至る、而して劇の神髓は、人格及個人にあり、從ひて文學的史家はその叙説を顯著なる人格、及人身上の出來事に集中せしめ、社會的道程中に働きつゝ、割合に鮮明ならざる、心的及自然的影響のみならず、社會生活に於ける尋常頻發の出來事は、不問に付せらるゝ、素より人格及特異は、歴史の叙説上、相當の地位を占むべきや、疑を容れず、蓋し之を相當に

揚言せずんば、歴史は社會實在を、描寫し得ざるべきを以てなり、されど之を過度に揚言することきは、社會生活に實在し、又根蒂深き暗流として、主として社會生活の進路を、決定すべきものは、曖昧に付せらるゝの弊を生ず、特に「直接に文書中の、文章を讀むに臨み、推想餘り誇大に失し、針小棒大殆んど測り得へからざる、」弊あるに至る。吾人は此點に付、夙に碩學マルサスか、一隻眼を有せることを、指摘せることあり、(本誌マルサス記念號中拙稿二三頁以下參照) 又同じく史家の間にありても、主として個人的、特異的、一時的要素を觀察し、昔時の傳説を固守せんとする者に反し、主として集合的、一般的及永續的の要素を觀察し、人性の繼續的慣例 *Habitudes successives* を描寫せんとする、文明史家起れるも(東京專門學校出版部藏版村川及石澤両文學士解説 *Langlois* 及 *Seignobos* 歴史研究法綱要參照) 右の弊を免れんとせるかためなり、素より社會學者 *Ross* の如き、社會學者は特異を、抹消し去るべきに反し、史家は無變及個性(ユニークネス)(この個別的性質は、史家の重要商品なり)を、取扱ふべきことを、主張せる點に於て、歴史の題目陳述上、科學的精神よりも、文學的精神勝つべきことを、正當となせるに似たり、されど史家の仕事と、社會學者の仕事とを、右の如く區別し得ざるは、兩學の範圍に於ける、現代發達の實際により、示さるゝか如し、特に *Ross* か史家につき、恰も右の如き辯護を、加へつゝありし當時の米國に、國民生活を決定すべき暗流として、實在し又根蒂深き事實に、注意するの必要を唱へし、科學的一歴史研究者は起れり、要するに史

* James Harvey Robinson, *Essay on History*. Columbia Univ. Press, '08 and *The New History*, '12. 二者共に未見に屬するも便宜上附載す。

實を陳述するの文學的方法是、科學的目的を壞る、講談的興味は、科學的興味に反對なり、その結果として社會學者は、文學的史家につき、唯輕微なる助力を仰き得へきのみ。

六

同様に歴史家か、社會生活の一面又は數面のみに、その注意を専らにすることにより、社會實在の描寫を、迂くるに至る、現に今日迄に書かれたる多くの歴史は、政治史なり、國家又は政府の歴史たりき、否佛國に於て、間々罵倒されしか如く、單純なる戰爭史「*histoire bataille*」たりき、こは虞らくは政治學者政治家にとり、有益たりしならんも、社會組織及その發展上、勵ける諸力を、社會學者のため、啓示するには不充分なりき、政治史否一般に、諸種の偏面的歴史は、民衆生存のあらゆる部面につき、陳述を遂ぐるなし、されど社會學者として、歸納を遂ぐるに足る丈け、充分に廣かるべき基礎は、かゝる陳述のみなり。

後に評論すへきか如く、所謂歴史哲學を進めて、或は社會發展學說を、究め得へきものあらん、されど史上の社會を、一層よく了解し得るために、古文書材料に就き、社會學的方面を詮議し、依りて歴史により、實在の認識を遂げ、利益を收むること、肝要なりとすへきは、古來の眞理にして又依然として然り、政治史的考察の缺點として、由來學者は國民の意義か、國家の膨脹及威勢にのみ、存するものゝ如く觀し、その實は之を重んぜざる意義か、全國民そのものにつきて存せ

す、時の天子王朝のみに、存せることを忘れたり、Scherrer は獨逸諸家の史記を研究し、史家は所謂國家の動作、同盟に關する外交往復文書、戰爭及講和を、特に國君に寄せて、可なりなし遂げ得たりと、信せしことを示せり、史料考察上その以上に、一步を進めたる際にありても、第一に美文學を、その時代國民生活の花として、併せ叙説したり、されど諸事實の内部聯絡を付せず、寧ろ單純なる添物として説けること、假令は世界史及第十八世紀史の著者たる、F. Ch. Schlosser (二七セー一八六一) 及その門下に就きて看るか如し、かくて英國の史家は、先づその史記中、商業に關し、興味ある枝葉的説明を加へ、その代りに次いて、新名目「文明史」を使用するに至れりとは、Scherrer の説ける所なり、氏は之と共に希臘の大政治家、假令は Thucydides, Polybius, Diodorus Siculus 羅馬の大政治家、假令は Livius, Julius Caesar, Tacitus, Sallust は、その他の點につきても、模範視せらるゝ所なるか、その公民社會の諸類別を、記載することも、彼等により當然とせられたることを注意せり。

貧民の慘狀に、勘からざる刺戟を受け、不朽の名著を、大成するに至りしマルサスは、或意味に於ては、歴史考察法を一新せしむるの、一先驅者たりきと説くも、過言たらざるに似たり、蓋し史觀に於ても、下層民の狀態を特に斟酌すること、考察の物體となれるは、佛蘭西革命後、佛國に社會主義者、起れる以後に存すればなり、その狀態は社會主義者により、極めて不良なり

として描かれしより、人或は最早泰平なる發展を、信せざるに至り、社會革命のみに、その希望を繋ぐに至れり、その思想はその見解の土臺を、獨逸民族の普通農場共有制 *Feldgemeinschaft* におとし、*Gracchus Babeuf* (一七六〇—一七九七年) により言ひ出され、一面伯 *Saint-Simon* (一七六〇—一八二五年) は、その共產主義を、古基督教に汲めり、獨逸にてはその少く以前に、*Justus Möser* (一七二〇—一七九四年) あり、一七六八年の著書 *オスナブルック史中*、自由平農民の變化せる、狀況を叙説しつゝ、之を人口の要部と指摘せり、氏の以後氏を模倣せる人なかりしも、氏はその叙説上、氏正當に言へるか如く、國民體 *Volkskörper* とその堅實とに着眼したり。

一面に於ては又英國の影響に動かされ、獨逸學者は第十八世紀の末、極めて手廣く構想されし、獨逸諸小國々憲史を、書かんとするに至り、その風は次いて又獨逸帝國諸「自由都市」の、憲史に及ぼされ、かくて特權仲間組合制により、公けの自治權を收め得たる、工業的公民の勃興勢力に、關する知識は、是等自由都市の行政、及經濟經營に關する叙説により、豊富となされたり。されどその以外にありては、諸小國及帝國の、社會史及科學的歴史は、大膽の企て視されたり。次いて佛國革命は、史家を促して、深き沈思に就かしむるの外なかりき、素よりその初めにありては、特に *Robespierre* を首領とせる以後の、過激革命主義の *Jacobins* 黨に、對する嫌忌のため、革命を非議せるも、その後五十年ならずして、第十七世紀に於ける百姓一揆 *Bauernkrieg* の

如き出來事を、その研究題目とするに至れり、かくて今や農民及諸工業都市の狀態に、着眼して研究すること、明かにせられたり、而してかゝる考察方針は、社會に關する科學的研究の、手引たるに至れり、その率先鼓吹者は、著聞するが如く、佛の Auguste Comte 及英の Herbert Spencer なり。

獨逸諸家の史記は、その記述及叙説の、委曲を盡す點に、正當に賞揚すべき、眞理愛着を示すことに於て、探るべきものと信ぜられつゝ、第十八世紀中の史記は、實は讀者をして、その煩に耐へさらしむるものありしか、遂に Leopold von Ranke (一七九五—一八八六年) は、眞に獨逸の特色とすへき、眞面目なる研究と、公正なる判斷とに、有力なる裏書をなせり、されど之と共に又英國特に又佛國の、最も有力なる歴史本を模範とし、讀み易き恰好の著書を編めり、その著書は主要特色を、個別に詳説せるに拘はらず、一般考察上客觀性を失はさりき、されどその諸門弟は、物的政治的普通事項の、取扱に於けるよりも、寧ろ氏による傳記的叙説方面を、祖述して之に秀いて、その著作物中には、肖像畫術も流行したること、假令は York. Stein. Gneisenau. Bismarck その他の傳記につきて、見るが如し。夫れその著羅馬史 (三冊一八一—一八三二年) により、羅馬史研究上、一革命を惹起せりとせらるゝ、Berthold G. Niebuhr (一七七六—一八三二年) 以來の獨逸史記は、常に適正の判斷を、下すの方針により、適法なる取扱と、史料の科學的解説、即ち所

謂史料考證 Quellenkritik とを以て、その大名聲を博するに至り、之によりて又傳説の眞僞を、鑑別することは、最も確實に達せられ、又その取扱振りは、歴史研究法上承認されたる事功となり、而してそれは特に紀念出版物 Germaniae historica の發行により、示されたる所なり。

輓近に至り Karl Lamprecht は、社會學政治學及文學上の知識を土臺とし、浩瀚なる獨逸史（一九〇四年）を著はしたり、就中先づ傳統的物語的仕方によらず、寧ろ論說的形式により、次いて之を傳統の物語態と、交叉循環せしたり、内容によれば同書は、最早純政治史類に屬せず、寧ろ文明史に屬す、彼は諸時代の流行精神として、それぞれその時代の諸形勢を、生ましめたるものを、捕捉せんとせり、從ひて又慣例的紀別 Periodeneinteilung を棄て、その代りに一國に於て、隨時風靡せる、精神狀態及特色ある氣分を、創造的形勢型として、立てんと欲したり。然るに Th. Lindner は、その著歴史哲學中、かゝる紀別を、全く誤れりと考へたり。此點に付 Scherer 評論せる所によるに、一國民の特色と共に、外より採り入れたる新開化元素、假令は獨逸に容れられし、ゴールの風習、羅馬の法律觀念、及基督教の宗教觀（普及せる羅馬加特力教會による）に付、その影響及普及を示し、引續き是等外來元素を修飾して、ゴール羅馬文明の分子を、驅除するに至る迄の狀況、最後に公民の都市工業、及その養成機關に現はれたる、特有なる復興獨逸精神の、再現を明かにすべきなり、然るに Lamprecht は、その代りに判斷を與へずして、漫然率直に俗

人、詳言すれば國民衆庶の運命を觀察し、ランケの如く、その俗衆生存の諸時代、假令は騎士の繁榮期、諸都市に於ける、公民分限出現時代に於ける、その狀況變化を示すことに満足し、その公民分限につきては、之を以て小工業及大工業による新營利、並に茲に勃興し宗教改革に暴露せる、個人主義の搖籃として、特に讚美することを敢てせざりき、氏の見によれば、國民の精神は、藝術及學問の上に、呈露せらるへしとし、かくてその根元精神に充てる表露を、此範圍に著しく遂げ得へき、國民の精神生活を、熱心に詮策したりとせり。又 Lamprecht カアテュル人種及國民の、各別史を總合し、一の世界史萬民史を、なさんとするの意向を、表白したるに對し、こは一の奇異なる企圖たり、各別史のみ社會學的原則により、攻究さるべきなり、之によりてのみ、豊富に過ぎたる史料を取捨選拔し、その結果を普通發展史の表章にあて、認識を遂げしむるの、用に供するを得んと評論したり、吾人は今率直に此評論を紹介するに止め、他日之か是非を詳論し、判斷するの機會を得んと欲す。

七

從來の歴史は、前に説けるか如く政治史に偏せるの嫌ありき、そは史家 Freeman か、一八八四年 Oxford 大學史學教授就任講演中、その古き前任者 Goldwin Smith (一八三二—一九〇〇年) を評せる中に、「歴史は過去の政治學に過ぎず、政治學は現在の歴史に過ぎず」と、説けるによりても明かにすへし、而してかゝる歴史か、特に獨逸に於て、近時如何にその風を、變しつゝありしか

も、亦以上略叙する所ありき、兎に角歴史に於て、社會の事實を顧慮すること、多きに至るも、結局社會學者として取扱ふべき、事實の一部だけ、授くるべきのみなるべきに拘はらず、社會學者と科學的史家、詳言すれば科學的方法を使用し、社會實在の忠實なる、陳述を目的とすべき、歴史家との協力は、最も親密なるの要あり、特に文明史的研究上、特別の一時代内に於ける、社會の類別及構成、社會組織の組立て等を、認識せしむべき詳細の材料を、社會學に授くるの狀あるべきと共に、社會學は社會の構成、及その諸原因に關し、明快なる洞察を遂げ、社會共同體の變遷及運行を叙説し、史學の研究に、裨益する所あるべきなり、社會學者は科學的歴史を必要とす、その助援なくして、社會の目錄を完成し得べきに非ず、又社會學は一學者か巧みに評論せる如く、單純に例證されたる心理學たるを以て、満足し得べきに非ず、拙くともその最終發展にありては、又解析され比較されたる、歴史たるの要あり、最後に史的研究法は、社會學者にとり、極めて肝要なり、嚴正なる意義に於て、史的現象を取扱ふべきは、社會諸學に限るを以て、史的研究法は或意味に於ては、社會諸學に特有の方法なりと、正當に主張せる Comte は、更に進みて之を過重せるの、嫌なしとせさりき、社會學研究上他の諸科學的研究法以上に、史的研究法を重んずべき、理由なかるへしと雖も、此方法によりて發展の大勢を看破し、又社會の變遷を惹起すべき、諸要因を察し得べきや、謂ふ迄もなし、史的研究法を重んずることにより、虞らくはあらゆる時代、及民衆の科學的歴史をして、社會學者の最大所望資料たらしむるに至るべく、東洋

の社會學者にして、東洋の社會史を、異端視するの弊もなきを得ん、一面科學的歴史家も、社會學を必要とす、社會組織及發展の諸原理につき、多少の知識を有せずんば、その取扱へる事實につき、適切なる配景を収め兼ねへし、又かゝる原理に訴ふるなくんば、諸事實を正當に解釋し得ざるへく、社會の諸變動につき、その原因を説明し得ざるへし、科學的歴史家にして、社會學的法則及原理の、批評的知識を有したりとせば、その研究を一層科學的に遂げ得へし、かくて吾人は結はんぞす、科學的歴史は社會學者に必要なりと、同様に社會學は、科學的史家に必要なりと。

八

第十八世紀中當時偏理思想の學風に驅られ、人類進歩に關して起れる、一團の推論的思索にして、歴史哲學として知らるゝもの起れり、(歴史哲學は「往々雲の中へはいつてしまひまして、實際の社會を、度外に置く傾向のあるのは」、甚だ遺憾なりとせられし坪井博士は、前記の著書中、歴史哲學と呼ぶを俗語なりとし、理論史學と呼ぶへしとせられたるも、今姑らく普通の用例に従ふ) 歴史哲學の概念は、甚だ不定なるも、假りに之を解し、人類社會生活を、形成發展せしむべき、法則の立定なりとせんか、かゝる人間史として、準備されたる最初の觀念は、之を獨創に富める、伊太利の哲學者 Giovanni Battista Vico (一六六八—一七四三) の大著 *Principi di una scienza nuova d'intorno alla comune natura della nazioni* 1725 に、求むべきものゝ如し、同書中「予は一切の國民が、野蠻なると開化せるとを問はず、三つの慣習

を有するを見る、即ち凡て幾分か宗教を有し、何れも莊重なる夫婦約束をなし、又凡てその死人を葬るを見る、故に是等永代普遍なる三慣習を、この新學の三原理に立てたり」とし、是等に關する諸施設諸慣習の、起源來歴を尋ねて、原始の「粗野」に及はし、その發展を逐ひ、又かゝる慣習の起源を、之を惹起せる心的狀態に歸せり、爾來 Lessing, Herder, Condorcet, Hegel 等、此範圍に述作せる人は尠からず、就中最も徹底せる研究を遂げ、一貫せる一法則により、普通發展の流れを説ける點に於て、非凡の意義を有するは、Hegel, Vorlesungen üb. d. Philosophie der Geschichte. Werke Bd. 9. 1837 なり、その史觀の基本思想とせる所によるに、道德人が不自由より、自由へ發展するは、人間進歩過程の正道を、達成する所以なり、従ひて世界史は自由概念の、一般元素に於ける發展にして、それは倫理的共同體、又は人類間に現はるとせり、兎に角是等の人々の著作物は、形而上學的たらず、假想の諸觀念、諸本體、諸實體を立て、之により實在を説明せんと、するか如きことなかりき、寧ろ特殊の方法により、史的現象の背後に横はり、人類進歩を説明すへき、特定法則又は原理を、發見するにありき、歴史哲學の研究は、爾來その跡を絶てりとするを得ず、否寧ろ近年に至り、新たな色彩の下に、論爭せらるゝとなし得べきものあり（史林第五卷第三及四號所載、米田博士「軌近の歴史哲學と社會哲學」及岡氏近著「新理想主義の歴史哲學」參照）而も亦史家 Honegger か、前世紀八十年の頃、現今歴史哲學は可なり捨てられ、その代り畧之ともし目的を以て進むも、他の研究法及組合せ法を、用ゐんとせる文明史は起れりとし、歴史哲學を以て、

* cf. Honegger, Katechismus der Kulturgeschichte. 2. Aufl. '89. S. 9.

文明史の先驅者視せんとせるも、理由なきことたらす、蓋し古歴史哲學者の研究方法には、著しき缺陷ありしを以てなり、詳言すれば古歴史哲學者か、解決せんとせる問題も、社會學の主要題目の一つ、即ち社會發展又は進歩問題と、同しかりしは明かなり、されど前者の研究方法は、輓近社會學者の方法とは全く異れり、第一に史的發展につき、例外なき一般法則を、是非とも發見し、史的運行に於ける、事々物々を説明すべく、凡てに貫通すべき一原則を、立せんとするの要求は、當該研究材料に、不備及缺陷あり、又主として有史時代開化國民の、材料に限らるゝにより、破れ易く又見込なし、嚴正の意義によれる人間の歴史は、この方法によりてはその望なし、假りに此點に讓歩するも、古き建設的歴史哲學には、方法上の第二缺點を伴へり、即ちその方法は科學的たるよりも、寧ろ推論的なりき、大部分はその進歩に關する學說を、史實に基づきて建設するよりも、寧ろ先驗的推理より抽出せり、史的經驗の活ける内容に臨むも、先入既定の發展型及條件を支持しつゝ、容易に所謂法則に歸結し得たり、然るに輓近の社會學者は、事々物々を説明すへき、普遍の抽象原理を求むることなく、寧ろ社會的變動を、惹起すの作用ある、心理的要因を尋ぬ、又眞面目にして冷靜なる研究の目的上、確實なる經驗の根據を、決して忘るへきに非すとなす、「物極則反、勢至則危、理極則變、有必然之理也」との定言あるかために、史實を枉けて迄も、之に契合せしめんとするか如き態度なきは、輓近社會學者なり、實に此意味に於て、社會學は古歴史哲學に對する、輓近の科學的後繼者たりと言ふも、誣言にあらず。(未完)